

《華語拼字妙法》の音系

— 「南京官音」の一資料 —

内 田 慶 市

I. 本書の概観と本稿の目的

I-1. 本書の入手経路

本書は筆者が87-88年に上海に滞在中、古書店で偶然入手したものである。

I-2. 本書の体裁

洋装本一冊、大きさは、25.2cm×19.3cm。

表紙、奥付、英文の“PREFACE”のIV P以前、および後ろの“字目便查 (VOCABURARY)”の207 P以降が欠丁しており、正確な出版（発行）場所、出版年月日等是不詳である。

“PREFACE”は最終頁が6頁，“教授法芻言”1頁、次に“TO ASSIST THE BEGINNER TO COMMUNICATE WITH THE TEACHER”（いわゆる“課堂用語”）が2頁のあとに第一課（4 P）から第百課（203 P）までの本文が続く。

本文は、各課見開き2頁で、左の頁の柱に漢字で《華語拼字妙法》、右の頁の柱に英文で《ANALYTICAL PRIMER》とある。左の頁は、その課に出てくる新出漢字（単語ではなく単漢字）の構造分析（偏旁の分析と筆順）、意味と発音、そして課文が収められている。右の頁には、課文の英文訳と、“EXPLANATORY NOTES”と名付けられた、その課の注釈説明（文法、語彙等）、および“SYNTHETIC CHARACTERS”として、その課に出てきた漢字の中から2～3字をピックアップし、その同系字或は同音字をいくつか

挙げて発音と意味を記している。

本文の後には、“字目便查 (VOCABULARY)” と呼ばれる“漢字索引”が付けられているが先にも触れたように204 Pから206 Pまでしかなく、それ以後は欠丁となっている。

I-3. 本書の編者について

“教授法芻言”の最後に次のように記されている。

中華民國元年五月美博士萬應遠口授辛塘居士夏葭塘筆述

また、“PREFACE”にも、次のようにある。

The acknowledgements would be far from complete without special mention of my teacher, Mr. Hsia Gia Tang, who was made responsible for the Chinese sentences.

“萬應遠”については、《近代來華外國人名辭典》(中國社會科學出版社 1981) に次のように見える。

Bryan, Robert T.

萬應遠

美國南浸信傳道會教士。1886年來華，在揚州、上海等地傳教。他是上海滬上大學(初名上海浸會大學，Shanghai Baptist College and Theological Seminary)的創辦人。(63 P)

《中國基督教百年史》(湯清著，香港道聲出版社 1987)でも、次のようにある。

一八八五年有萬應遠牧師 (Dr. & Mrs. R. T. Brayan (ママ)) 夫婦，到來。(210 P)

一八九六年萬應遠在上海開設聖經班，訓練熱心華人傳道。一九〇〇年他辦的聖經班成爲聖經學校，再後就發展爲滬上大學的神學院。(211 P)

このようなことから、本書は、Southern Baptist 会(美國南浸信會)の Bryan (萬應遠)によって、中国人、夏葭塘の協力の下に、1912年(民國元年)以降に出版されたものであるということがわかる。

I-4. 本書成立の意図とその教授法について

本書は、編者自身の中国語学習の経験に基づき、初めて中国にやって来た宣教師達が、「二年間で2,000字の漢字をマスター出来るように」との意図の下に編まれた中国語学習書の、「初級編」或いは「第一巻」であることが、以下の“PREFACE”の記述、および本書に収められた単漢字の総数（造字成分=漢字の構造分析に使われる漢字，“SYNTHETIC CHARACTERS”に収められた漢字も含む）が1,005字であり、2,00字には達していないことから窺い知ることが出来る。

The author spent two years in learning to analyze and write the two thousand characters, taking five a day, five days in the week, four weeks in the month, ten months in the year, and with sufficient reviewing to enable him to stand an examination on the whole two thousand at the end of the two years. This was done to test the system before publishing even the first volume. He is also convinced by his own experience that two thousand Chinese characters can be thoroughly learned in two years by a new missionary who has no other duties that would hinder the study of the language. Many useful things have been thought of in connection with this first volume, but they have not been put in for fear of over-loading the book. Some of them will be put in the later volumes, and others can be found in dictionaries and other books.

(V p)

「一日5個、一週間に五日、一ヶ月に四週間、一年間に十ヶ月」のペースで行けば、確かに二年間で2,000字となるわけで、いかにもアメリカ人らしい合理的な考え方である。

また、その教授法も極めて合理的である。“教授法芻言”には次のようにある。

大凡教授西士之法、約有數端。(一) 貴簡要、(二) 貴活潑、(三) 貴比方指點、(四) 貴清爽舒緩、(五) 貴忍耐詳細、(六) 溫習透熟、何謂簡要。

教初來西士、話不易長、只須先用一二字短句、使之易記、所謂要言不煩是也、何謂活潑、無論教字教話、俱要身手活動、描摹出喜怒哀樂各種形狀、聽者乃易明白、何謂比方、指點。用眼前之桌椅茶杯筆墨等物、反復取譬、或指點窗外之花鳥風月、以明曉之、何謂清爽舒緩。將各字之五音出氣不出氣、分別輕重高低、慢慢讀出、口音要清、字音要准、何謂忍耐詳細。已經教過之字義、學者或尚未明白、仍須平心和氣、再教幾次、細細解說、必使學者心中了然而後止、何謂溫習透熟。已讀過之課、必須逐日通理一遍、果能將此百課溫習、爛熟胸中、則華語必大有可觀、思過半矣、

「一字話、二字話から入り、身の回りの言葉から覚え、音をはっきりさせ、解らない所は辛抱強く何度も繰り返し教え、学習者もよく復習をする。」といった方法は、江戸時代の唐通事や、徂徠の『譯文筌蹄』のそれと通じるものを感じる。

I-5. 本書の使用された地域について

Southern Baptist 教会は1844年に Issachr Roberts (羅孝全) によって広州で最初に伝道が開始され、1847年に Mathew Tyson Yates (晏馬太) によって上海にもその根拠地が置かれ、その後更に華北、華内地区へと拡大していくが、本書は、編者の経歴からして、上海を中心とした宣教師向けに作られたと見るのが自然であろう。

ただ、“PREFACE” に Methodist Episcopal Mission (美以美會) の G. A. Stuart の名が登場していることは注目しておいてよい。

The late Dr. G. A. Stuart of the Methodist Episcopal Mission heartily approved of this plan, and agreed to be co-author, but was unfortunately, taken away before he was able to do his promised part. He made some very suggestions and wrote a few notes. (V p)

Stuart (1859-1911) は、《近代來華外國人名辭典》には次のようにある。

美國美以美會傳教醫師。1886年來華。在南京美以美會創辦的醫院任職。1898年後在南京任匯文書院 (Nanking University) 院長。(461 p)

Southern Baptist 教会が、南京をもその活動の中心としていたか否かに関しては今までのところよく解らないが、例えば次のような記述は見られる。

1899年女子寄宿學校を設立し、1903年男子の學校をも設立したが、1907-17年の間に非常の發展を示し、(中略)此外上海に於ては1907年10月米國公理會と相提携して一つのセミナーを起し、南京にては1912年以來各派共立醫學校に一人の講師を提供しつつあり。

(山口昇編『欧米人の支那に於ける文化事業』上海日本堂 大正10年 393-394 P)

また、金陵大学 (University of Nanking) に関する次の記述などからすれば、Baptist 教会と南京との間になにがしかの関係があつことは明らかであろう。

本校は1910年2月美以美會開設匯文書院、長老會開設益智書院及基督書院三校の合併によりて成り前記三會の共同經營にして(中略)三會聯合後一年にして前記三會及南長老會 (Southern Presbyterian) 南美以美會 (Southern Methodist) 並に南北 Baptist 教會によりて East Union Medical Collge なるもの南京に設けられたるか、1913年同大學は金陵大學の一分科となり(後略)(同上 1126 P)

してみれば、本書の作られた地域、使用された地域、及びその言語というのは、上海のみならず南京をも含めた華中地域と見るのが妥当なところのように思えてくる。

なお、ついでながら、上海で Baptist 教会を開いた M. T. Yates は、《中西譯語妙法 (FIRST LESSONS IN CHINESE)》(SHANG-HAI AMERICAN PRESBYTERIAN MISSION PRESS 1899) という上海語のテキストの編者でもあるが、本書の《~妙法》という書名も或いはこれに倣ったものであるかも知れない。

I-6. 本書で用いられる中国語(「華語」)についての示唆的記述

“教授法芻言”に見られる次の記述は、これまで述べてきたことと併せて、

本書の中国語が、いわゆる「北方語（狭義の）」ではないことを示唆している。

①何謂清爽舒緩。將各字之五音出氣不出氣、分別輕重高低、慢慢讀出、口音要清、字音要準。⁽¹⁾

②至本書所用之口氣字面、或與北方官音不同者、祈酌改讀、[如北用僧您哩嗎等字、本書只以你我呢麼四字括之]

以下、本稿では、本書の「音系」について、それが「南京官音」に基づくものではないかという仮定のもとに論をすすめていく。

「南京官音」の資料としては、主に次の文献を参照することとする。

1. Hemeling (1902) 《THE NANKING KUANHUA》

(The Inspector General of Customs. SHANGHAI)

2. 趙元任 (1929) 〈南京音系〉(《科學》第8期第13卷)⁽²⁾

3. 黃典誠 (1987) 〈一百年前漢語官音初探〉(「中國語言學會第四屆年會」提出論文)⁽³⁾

II. 本書の音系

II-1. 声調

本書での声調は「五声」あり、それを「五音」と称している。その内容は、「上平」「下平」「上声」「去声」「入声」の五つであり、表記は以下の如くである。

中國字有五音，上平，下平，上聲，去聲，入聲。(第97課，196 P)

上平 杯¹ bei

下平 人² rēn

上声 打³ dǎ

去声 布⁴ bù

入声 一⁵ ih

南京語でも「五声」であり、本書はそれと一致している。

II-2. 声母と韻母

本書に収められた1,005個の全漢字の音節表記から帰納される音節表は、[附表]の通りであるが、その特徴を、声母、韻母に分けて見ていく。

なお、参考までに、黄典誠(1987)による〈KUAN-HUA SIN IOH TS'UEN SHU〉(1888)の表記(Kと略す)、および趙元任(1929)(Cと略す)、Hemeling(1902)(Hと略す)⁽⁴⁾の表記を附す。

II-2-1. 声母

II-2-1-1. 声母表

[本書]	b	p	m	f	d	t	n	l
[K]	p	p'	m	f	t	t'	n	/
[C]	b	p	m	f	d	t	/	l
[H]	p	p'	m	f	t	t'	/	l

[本書]	g	k	h	g(i)	ch(i)	hs
[K]	k	k'	h	k(i)	k'(i)	hs
[C]	g	k	h	j(i)	ch(i)	sh(i)
[H]	k	k'	h	ch(i)	ch'(i)	hs

[本書]	dz	ts	s	sz(i)	dj	ch	sh	r
[K]	ts	ts'	s	/	ch	ch'	sh	j
[C]	tz	ts	s	/	j	ch	sh	r
[H]	ts	ts'	s	ss(ũ)	ch	ch'	sh	j

II-2-1-2. 声母の特徴

〈1〉 g, ch の音価

趙(1929)と同様に、本書でも ch は後ろに [i] [y] が続くときは [tʂ'], それ以外は [tʂ] と考えられる。

ch [tɕʰ]

chi (氣), Chiang (強), chiao (橋), chiu (球), chu (去)

ch [tɕʰ]

chi (遲), cha (茶), chao (炒), chen (趁)

chu (初), chou (臭), chung (沖)

gの音価も [tɕ] であるのか [k] であるのか興味深いところであるが、ch (i) との整合性からして、恐らくこれも、後ろに細音 ([i] [y]) を伴うときは、[tɕ] であり、洪音のときは [k] であると考えた方がよいと思われる。

g [tɕ]

gi (幾), gia (家), giao (叫), gai (界), gien (見), gih (給)

gin (今), ging (京), giu (九)

g [k]

gai (該), gan (感), gang (扛), gao (高), geh (格), gen (跟)

geng (更), go (個), gwa (掛)

Kでは、これらは、k, k' で表記されており、黄は、その音価を [k] [k'] としている。 (“近今” = kin—kin, “機器” = ki—k'i)

この点について、高本漢 (1941) には次のようにある。

Mateer 跟 Kühnert 把南京方言的 $tɕ_2$ 寫作 'k'，這或許因為第一層他們覺得人家用 'ch' 來寫的北京 $tɕ_1$ 比南京話的 $tɕ_2$ 較前，第二層也許因為有時候聽見南京俗話仍舊讀 k (換言之就是 [c])。Forke 在 Comparative study of Chinese northern dialects, China review, 1891裏關於南京話的 $tɕ_2$ 曾經說：“這個 'ch' 音在 i, u 的前頭比北京近於舌根一點兒，但是沒有沂州跟登州離舌根那麼近，[在這兩個地方他把這個音解釋作 c]，那麼，要是用 'k' 來譯它就不對了”。我對於這個意見完全贊成。Hemeling 也寫作 'ch' 而不寫作 'k'。(189 P)

南京 '去' 字白話音 k'i, 文言 $tɕ_2y$ 。這是一個很特別的字，此外南京逢 i, y 元音前跟北京一樣，只有 $tɕ$, $tɕ'$ 而無 k, k'。(189 P)

有些方言裏頭這種顎化現象只到c的程度，像這樣的照 Forke 說有東北的幾種方言，如沂州，登州還有中部湖南的幾種方言。在南京的俗話也可以遇見c。(248 P)

至於“在官話中靠南的方言裏頭k還是舌根音”這句話至少可以說他是武斷。在下列的方言裏在i, y的前頭只有tɕ, 沒有k:……江蘇的一種方言(南京官話)……。(248 P)

趙(1929)も次のように言う。

[tɕ, tɕ', ɕ] 比北平的略後(1007 P)

また，“給”“去”の二字についても次のようにある。

g系聲母跟除給去兩字白話音讀gii, kih以外不跟i一類, iu一類韻併。(1016 P)

高(1941)の研究は1900年初頭のもので、本書とほぼ同時期のものであり、この時期の北京官話はもちろん、南方の官話(南京語)においても、見系声母は(北京よりは後ろよりではあっても)すでに口蓋化していたと見る方が妥当であり、本書のg(i), ch(i)も口蓋化した[tɕ] [tɕ']であると考ええる。

ただ、“去”は文言音の[tɕ']を採用しておりch(i)は[tɕ']とみてほぼ問題はないと思われるが、“給”は本書でも趙(1929)と同じくg(趙のgは[k])を用いてgihと表記しておりg(i)については若干疑問は残る。

なお Hemeling は“給”に対してchi [tɕ] とki [ki] の2つの音を与えている。

〈2〉尖団の区別がある。

すなわち，[ts] [ts] [s] と [i] [y] の類は結び得る。

tsu (取, 娶)	↔	chu (去)
tsien (千, 前)	↔	chien (謙)
sien (先, 仙)	↔	hsien (現, 縣)
siao (笑)	↔	hsiao (曉)

tsing (清, 請)	↔	ching (輕)
sing (星, 姓)	↔	hsing (形, 刑)
siang (箱, 相, 想)	↔	hsiang (香, 享)
tsyen (全)	↔	chyen (權, 勸)
tsih (七)	↔	chih (泣, 乞) ⁽⁵⁾
si (洗, 細)	↔	hsi (喜, 希)

尖団を区別するのは、南京語と一致している。

<3> dj [tʂ]/ch [tʂʰ]/sh [ʂ] の一部が, dz [ts]/ts [tsʰ]/s [s] となる。

すなわち, 知系声母のうちの一部 (特に狂組) が, 精組声母と区別されない。

dzao (找一早), dzung (重一總), dzu (助一阻), dzj (知一子)

dzeh (窄), tsou (愁), sj (事), seng (生, 省)

これも南京語の特徴と一致する。

<4> sh [ʂ] と ch [tʂʰ] の混同がみられる。

これは「醇」(shwen) 1例のみであるが, 趙 (1929) によれば, 南京語でもこのような現象がみられる。

鼠黍在南京是 chuu, 在國音是 shuu, 純唇在南京是 shwen, 在國音是 chwen. (1023 P)

<5> l と n を区別する。

南京語では l/n を区別しないが, 本書ではそれを区別している。

Mateer 等も南京語の表記で l/n を区別しているが, これは, -n/-ng を区別するのと同様に, 西洋人の表記法の一つの特徴である。(Hemeling, Kühnert が n > l としているのは例外的)

しかし, それに対して, 趙 (1929) が次のように言うのは言い過ぎであろう。(これについての私見は -n/-ng のところで述べる。)

書籍当中最有價値的是高本漢的方音字典。従前西人講南京音往往拿它當一

種南式標準語看待、有些南京不分辨的音、例如 in, ing : n-, l-, 他們給它分辨起來、那就不成爲學術的研究了。(1006 P)

<6> その他

1. sz は \dot{i} とのみ結び、[s \dot{i}] を表わす。

sz \dot{i} (思, 死, 四, 寺, 巳)

この場合、s \dot{i} (事) との違いが問題となるが、半母音 [ɿ] [ɿ] の違いを意図したものであるかも知れない。(Wade で -sz と -ih によって、舌尖前音と舌尖後音を区別するのと似ている) ⁽⁶⁾ただ、“事”と“思”等は Hemeling では共に ssü で表記しており、韻母に差があるとは考えにくく、この点については疑問として保留しておく。

2. “顯”を Shien とするのは Hsien の誤りか。

II-2-2. 韻母

II-2-2-1. 韻母表

[本書] a e o ai ao an ang ei eo en eng ou ong

[K] a e o ai ao an ang ei eo en eng / ong

[H] a ê o ai ao an ang ei / ên êng ou /

[本書] u(wu) ui wei un wen wa wo wai

[K] u u(e)i u(e)n ua / uai

[H] u ui(wei) un(wun) ua(wa) / uai(wai)

[本書] wan wang ung i ia(ya) ie(ye)

[K] uan uang / i ia ie

[H] uan(wan) uang(wang) ung i ia(ya) ieh(yeh)

[本書] iu(yu) iai iao(yao) ien(yen) in(yin) ing(ying)

[K] iu iai iao ien in ing

[H] iu(yu) iai iao(yao) ien(yen) in(yin) ing(ying)

[本書] iang(yang) iung(yung) ü(yü) ün üen(yüen) i er

[K] iang iong ü ün üen i /

[H] iang(yang) iung(yung) ü(yü) ün(yün) üen(yüen) ü/ih erh

[本書] ah eh oh uh(wuh) woh ih üh ih ieh ioh yüeh

[K] ah eh oh uh ueh ih üh ih ieh ioh üeh

[H] / / / / / / / / (ieh) io üeh(yüeh)

II-2-2-2. 韻母の特徴

<1> o(oh)とe(eh)

1. 果攝一等は開合を区別せずoとする。

o (我, 餓), go (個, 哥), ko (可, 課)

ho (何, 河, 和, 夥), dzo (左, 佐, 坐, 座)

tso (鏗), do (多)

2. 遇攝合口一等精母, 遇攝合口三等莊組の一部もoとする。

dzo (做), tso (錯), so (所)

3. 假攝開口三等の知章組, 日母 (=麻韻) においては北方語と同じく, eのままである。

dje (這, 者), she (射), re (惹)

4. 入聲のうち, 山攝開口一等の見系, 同合口一等, 宕攝開口一等, 三等知章

組, 日母, 江攝開口二等の知章組, 咸攝開口一等見系で oh とする。

oh (惡), goh (各, 擱), koh (渴), hoh (喝, 合, 盒)

dzoh (昨), toh (脫), loh (落, 絡), djoh (着, 桌)

roh (弱, 若)

5. 入聲のうち, 曾攝開口一等, 梗攝開口二等では, 北方語では e [ɤ] ei [ei] ai [ai] となるが, 本書ではいずれも eh となる。なお, 山攝開口三等日母の“熱”なども同じである。

beh (百, 北), meh (墨), deh (得), teh (特), geh (格)

keh (客, 刻), dzeh (窄), djeh (摺), reh (熱)

以上のことは南京語の特徴に完全に一致している。⁽⁷⁾

すなわち, 北方語で uo となるものは, 入声以外は南京語では o となり (我, 多), 入声では, 端系, 知系で oh となる (脫, 落, 着, 若)。

北方語で o となるものは, 入声以外は南京語でも o であるが (玻, 波), 入声では末, 覺, 鐸韻で oh (抹, 撥), 麥, 陌, 德韻で eh (墨) となる。

北方語で e となるもののうち, 南京語では, 果攝で o, 入声で, 端系声母と知系声母で eh (特, 熱, 摺), 見系声母では鐸, 合, 盍韻で oh (惡, 各, 渴, 合), 陌, 麥, 德韻で eh (額, 格, 客, 刻) となる。

北方語で ai, ei となる入声字は, 南京語では eh (百, 北, 窄, 得) となり, ao となるものは oh (すなわちいずれも文言音) となる。

<2> iai

見系蟹攝開口二等が iai となる。

giai (解, 皆, 界, 街)

hsiai (偕, 懈, 懈)

chiai (楷)

これも南京語の特徴に一致する。

〈3〉“容”は rung とせず, yung とする。

これも黄によれば, 南京語の特徴である。

〈4〉“雷”“累”を lui とする。

これは, 北方語では lei であるが, 南京語では lui となる。

南京語の特徴の一つである。

〈5〉 ioh

南京語では, 入声のうち, 北方語では üe (文言音), iao (白話音) となるもののうち覺, 藥韻は ioh となり, その他の韻では üeh となるが, 本書でもそれと一致している。

lioh (客), gioh (覺), chioh (却), hsioh (學)

yueh (悅)

〈6〉“免”が men となる。

北方語の ian [ien] は, 南京語においては, 零声母および [tə] 系声母以外は en となるが, 本書では“免”のみで, “天, 邊, 年”などいずれも ien となっており, この点若干異なる。

〈7〉 -n/-ng を区別する。

南京語では -n/-ng を区別しないが, 本書では区別しており (“您” 1 例だけ ning としているが), この点, 南京語の特徴に一致しない。

ただ, どちらか一方しかないということではなく, Hemeling も述べているように, 同じ人間でも時により違いがあったり, un/ung では区別が残されているというように, 安定していないということであって, その点からすれば, どちらか一方を規範として記述するよりは, 区別を残すほうが合理的な処理方

法であるとも言える。このことは声母において l/n を区別することも同様である。

してみると、確かに、「n/ng 不分」「l/n 不分」ということは、南京語の大きな特徴には違いないが、それが区別されているからといって、「南京語ではない」とも言えないのではないかと考える。

<8> eo

本書では、一例であるが、“授”に対して sheo という表記がなされている。

この eo という表記は K に見えるが、これについて黄 (1987) では「流攝一等を eo と書き、寧波、台州方言のローマ字表記に同じであり、Wade の ou にあたり、その音価は [əu] であろう。」としている。

“授”は「流攝三等」であり、また本書では別に ou もあり、同じ「流攝三等」の“受、守”は shou と表記されている。これが一体どういうことであるのか、南京語と如何なる関係があるのかわからない。

<9> その他

1. “六”“熟”は白話音を採用して uh となる。

(Hemeling も同じ。K では“六”は iuh とする点が異なる。)

2. “沒”は muh となり、これは黄 (1987) によれば《五方元音》に同じであるという。

(Hemeling も K でも同じ。)

III. まとめ

以上、本書の音系について、声調、声母、韻母に分けて検討してきたが、先に触れた本書の成立とも併せて考えれば、ほぼ、「南京官音」に基づくものと結論づけることができると思う。

本書の語彙、語法についての検討もほぼ完了しているが、それは後日、稿を改めて論ずることとして、最後に、今回の作業を進めながら、ずっと気になっていたことについて少し申し述べておきたいと思う。

それは、本書の音節表記が、Edkinsの《A GRAMMAR OF THE CHINESE COLOQUIAL LANGUAGE COMMONLY CALLED THE MANDARIN DIALECT》(1864)や、《聖諭廣訓》の英語版(F. W. Baller 1892)、《官話指南》のフランス語版などのそれと非常に似通っているということである。Edkinsは問題があるとして、他のものはこれまで「北京語」で書かれていると考えられてきたものである。もちろん、詳しい検討をしたうえでなければ何も言えないわけではあるが、仮にそれらの音系が本書と同じ系統にあるとすると、実は非常に興味深い問題が浮び上がってくる。

一つには、つまり、語音は「南京音」で、語彙、語法は「北京語」という奇妙な関係である。そこからは所謂「正音」ということが問題となってくるであろう。(同じ《官話指南》でもHopkinsの表音は明らかに北京音である。)

いま一つは、語音も語彙、語法も「南京語」という可能性であり、これまで言われてきた「北京語」というものの全面的見直し、および「官話」の「類型(区分)」の明確化である。

これまでのこの分野の研究は、多くの先達によって、相当なレベルにまで到達しているが、語彙、語法からの研究に比べて、語音の面からのそれはそれほど多くないように思われる。今後この三方面からの有機的、総合的な検討が必要であると考えられるのである。そして、この場合、非常に有益と考えられるのが、上に挙げた資料をはじめとする西洋人の教本類や、ローマ字表記の聖書等

である。それらにみえる語釈や音注はきわめて「信頼性」の高いものであることを、今回改めて強く感じている。(たとえば、Hemelingの南京語の特徴に関する記述は、その約20年後の趙元任の記述とほぼ一致しており、その簡潔性という点ではむしろ趙元任を凌いでいるように思える。)ただ、資料は膨大であり、このような作業を進めていくには、多くの時間と労力が要求される。したがって、様々な人との共同研究、更には、コンピューターを使ったデータ処理なども考えていく必要があるのではとと思っている次第である。

1991.5.24脱稿

1991.5.29改稿

[付記]

本稿は1991年5月26日に開かれた「第6回中国近世語研究会」(大東文化会館)において口頭発表したものであり、平成3年度関西大学文学部共同研究の一部をなすものである。

なお、発表後、早稲田大学の古屋昭弘氏より、本稿に先行する成果として、佐藤昭氏の「清末民国初期の官話方言の音韻—欧文の字典資料を対象として—(I)」(『北九州大学外国語学部紀要』第64号 1988, 12)の存在を御教示頂いた。それによれば「正音」に関しても興味深い記述がなされているようであるが、今回は十分拝読する機会に恵まれなかった。古屋氏の御教示に対して、深く感謝するとともに、佐藤氏にも筆者の勉強不足をお詫びしたいと思う。

[註]

- (1)この「五音」は、多分、調音部位の名称としての「五音」を指すと見た方が無難なところであるが、本書では「五音」を声調の「五声」をも指しており、とりあえずこの部分は後者の意に解しておく。
- (2)この論文は1929年に発表されたものであるが、次の記述から本書の成立時期と非常に近いものといえる。
「本篇所根據的材料，大部分是根據一九二七秋作吳語調查時順便到南京所記載的發音，此外參考的就是憑記憶作者在一九〇七至一九一〇住南京時所聽得的。」(1006P)
- (3)この論文は、本書の成立の約20年前の1888年出版の《KUAN·HUA SIN IOH TS'UEN SHU HAN·ZI FAN LO·MA·ZI [ROMANIZED MANDARIN WITH MARGINAL REFERENCES] (TA·ING·KUEH SHENG·SHU·HUEI IN·TIH LUEN·TUEN)の音系について論じたものであり、それが「南京官音」に基づいたものであると結論付けている。
ただ、この論文には、明らかにミスプリントと思われる箇所もあり、また、テキスト全体を検討した上での結論であるのか否かも定かではないが、とりあえず、ここでの記述を信用することとする。漢字への同定作業をも含めた、このテキストの全面的検討は今後の大きな課題としておきたい。
- (4)Hemelingの表記はWadeを基にしており、基本的にはWadeと同じである。
- (5)“吃”がchihでなくchihと表記されているのは問題が残る。
- (6)Wadeの-sz/-ihについては、黄(1987)によるが、筆者は、現在までのところ、Wadeの中にszを見ておらず、この点も今後の検討に委ねたい。
- (7)この原則によれば、“果”“過”(いずれも果撮合口一等)も当然goとなるはずであるが、本書ではgwoと表記している。
また、趙(1929)によれば、北方語でuoとなるもののうち、見系では一部

を除いて(活など), o(oh) とならず ue となるとして, “國” “郭” “闊” の例を挙げているが, 本書でも “國” “或” を go, ho とはせず, それぞれ gwoh, hwoh としている。

他に, woh は djwoh (拙), shwoh (説) に表れるが, 趙は “説” も “多” “做” と同様に扱っており, これも oh となるはずではないかと思われる。

Hemeling では “過” “果” はともに ko (可, 課) とするが, “國” は kuai, “或” は huai, “説” は shuo, “拙” は chuai で表している。

いずれにしても, o(oh) と wo(woh) の違いが問題となり, o から uo (開口から合口) への過渡期の現象と考えられなくもないが, この点も疑問として残しておく。

なお, “曷” も hoh となるはずであるが, heh となり, 若干の混乱も見られる。

[参考文献 (本文中で書名, 出版社等を明記しなかったもの)]

C. W. MATEER 1903 《A COURSE OF MANDARIN LESSONS, BASED ON IDIOM》 AMERICAN PRESBYTERIAN MISSION PRESS, SHANGHAI (REVISED EDITION)

高本漢 1941 《中國音韻學研究》(趙元任等合譯) 商務印書館

D. F. KÜHNERT 1898 《SYLLABAR DES NANKING-DIALECTES》 WIEN

《江蘇省和上海市方言概況》1960 江蘇省和上海市方言調查指導組編 江蘇人民出版社

[附表] 《華語拼字妙法》所収単漢字音節表

	a	e	o	ai	ao	an	ang	ei	eo	en	eng	ou	ong	u (wu)	ui	wei	un	wen	wa	wo	wai	wan	wang	wang	ung	i	
		我 è		愛 ài		安 ān				恩 ēn				五 wǔ		爲 wéi		問 wèn			外 wài	完 wán	忘 wàng		醫 yī		
b	把 bǎ		玻 bō	擺 bǎi	包 bāo	半 bàn	幫 bāng	杯 bēi		本 běn	崩 bēng			布 bù												比 bǐ	
p	怕 pà		破 pò		跑 pǎo	盼 pàn	旁 páng	丕 pī		盆 pén	朋 péng			溥 pǔ													
m			麼 ma	買 mǎi		慢 màn	煤 méi		們 men	某 mǎi			母 mǔ														
f					飯 fàn	方 fāng	費 fèi		分 fēn	風 fēng	否 pǐ		父 fù														
d	打 dǎ	多 duō	帶 dài	到 dào	耽 dān	當 dāng				等 děng	陡 dǒu		都 dū	對 duì								短 duǎn	東 dōng	地 dì			
t	他 tā		太 tài	桃 tāo	談 tán	堂 táng					頭 tóu	疼 téng	徒 tú			吞 tūn									通 tōng	替 tì	
n	那 nà			乃 nǎo	惱 nǎo	南 nán				能 néng															呢 ne		
l	拉 lā			來 lái	老 lǎo	藍 lán				冷 lěng	櫻 yīng		路 lù	累 lèi	霜 shuāng											弄 nòng	裏 lǐ
g			個 gè	該 gāi	告 gào	乾 qián	扛 kāng			跟 gēn	更 gēng	殺 shā	古 gǔ	貴 guì				掛 guà	過 guò	拐 guǎi	官 guān	光 guāng	功 gōng				
k			可 kě	開 kāi	考 kǎo	看 kàn			肯 kěn		口 kǒu	苦 kǔ	愧 kuì			捆 kǔn				快 kuài	寬 kuān	恐 kǒng					
h			和 hé	海 hǎi	好 hǎo	憾 hàn			很 hěn	橫 héng	後 hòu			會 huì			花 huā		壞 huài	歡 huān	黃 huáng	紅 hóng					
g(i)																									幾 jǐ		
ch(i)																										起 qǐ	
hs																										喜 xǐ	
dz			坐 zuò	在 zài	早 zǎo	找 zhǎo	僻 pì		怎 zěn	走 zǒu	助 zhù	最 zuì														總 zǒng	
ts			錯 cuò	纜 lǎn	草 cǎo					層 céng	愁 chóu	聰 cōng	粗 cū													從 cóng	
s	灑 sǎi		所 suǒ	腮 sāi	掃 sǎo	三 sān				森 sēn	生 shēng	省 shěng		訴 sù	隨 suí							算 suàn	訟 sòng	細 xì			
sz																											
dj	乍 zhà	這 zhè			兆 zhào	站 zhàn	丈 zhàng			真 zhēn	正 zhèng	州 zhōu	主 zhǔ				准 zhǔn					專 zhuān	中 zhōng	徒 tú			
ch	茶 chá			差 chā	炒 chǎo	長 cháng			趁 chèn	城 chéng	臭 chòu	初 chū	垂 chuí			春 chūn					噉 chǎn	穿 chuān	沖 chōng				
sh	沙 shā	射 shè		曬 shài	少 shǎo	山 shān	上 shàng		授 shòu	甚 shèn	聲 shēng	受 shòu	書 shū	睡 shuì			醇 chún					拴 shuān	雙 shuāng				
r	惹 rě				饒 ráo	然 rán	讓 ràng		人 rén				如 rú									軟 ruǎn					

(▲は、造字成分或いは補充漢字として現われるもの)

ia (ya)	ie (ye)	iu (yu)	iai	iao (yao)	ien (yen)	in (yin)	ing (ying)	iang (yang)	iung (yung)	y (yu)	yn	yen (yeh)	i	er	ah	eh 額	oh 惡	uh (ueh)	woh	ih	yh	ih	ieh	ioh	yeh 悅
				邊	病											北 百	湖 總	不	必 罪			別			
				偏	貧	平											發		匹						
			妙	勉	名											墨	末	沒							
															法			福							
	丟	掉	電	定											答	得	讀			的		跌			
			挑	天	聽										塔	特	脫			踢					
				年	慫		女													匿		鼻			
	留	了	聯	林	零	兩											落	六	粒				畧		
																格	欄	國							
																客	渴	哭							
																晏	喝	或							
家	九	解	牧	見	今	經	江													給		揭	覺		
	求	楷	橋	謙	親	輕	強	去	勸											呢	屈	妾	却		
下		懈	曉	現	形	香	態	許	尋	懸												歇	學		
	就			踐	進	淨	將	聚		知					窄	昨							接		
	且	秋		千	滯			娶	全	此												七			
	些		笑	先	新	姓	想			事								宿	息						
										死					紙	割	摺	着	拙			直			
										遲								出				尺			
				顯						是								熟	說			實			
															熱	苦	難								